

本報告書の要約

第1章 中学生の学習行動

(1) 好きな教科・嫌いな教科

中学生の好きな教科ベスト3は、①体育（「とても好き」＋「まあ好き」＝65.1%）、②理科（52.8%）、③美術（51.0%）。男子は理科系の教科や体育・社会を好み、女子は芸術系の教科や国語を好む傾向がある。成績の自己評価が高いほど、「主要」教科を「好き」と答える者が多い。（表1-1、図1-1）

(2) 主要5教科の理解度

授業を「ほとんどわかっている」「70%くらいわかっている」のは、「数学」「理科」「国語」「英語」については半数程度、「社会」にいたっては3分の1強にとどまっている。いずれの教科についても、成績の自己評価が高い者ほど、授業の理解度が高い。理数系の教科を中心に理解度が若干高まっているものの、成績下位者の8割程度は十分に授業内容を理解しないまま過ごしている。（表1-2）

(3) 授業の受け方

全体的には、ノートをとるなどのまじめな姿勢が目立つが、「近くの人とおしゃべりをする」など適当に息抜きをしている者も少なくない。とはいえ、前回（第1回調査）に比べて、授業に積極的な姿勢を示す者が増加している。なお、こうした授業への姿勢は、成績の自己評価とかなり深くかかっている。（図1-2）

(4) がんばって勉強したい教科

がんばって勉強したい教科として、主要5教科、特に数学と英語をあげる中学生がかなりの割合を占めた。（表1-3）

(5) 家でどのくらい勉強しているか

家での勉強日数は、「ほとんど毎日（6～7日）」が18.7%、「週に半分以上（4～5日）」が23.0%であり、両者を合わせるとおよそ4割が週の半分程度以上の勉強日数を確保している。他方、「家ではほとんど勉強しない」と答えた中学生も2割弱に達している。成績上位者ほど勉強日数が増える傾向がある。（図1-3）

(6) 勉強時間、テレビ視聴時間、就寝時間

1日の平均勉強時間は1時間30分で、日曜日はこれよりも15分短い。学校が休みの土曜日は日曜日とほぼ同じ勉強時間である。テレビは、1日に2時間29分見る。勉強時間は成績の自己評価が高い者ほど長く、逆に、テレビの視聴時間は成績の自己評価が低い者ほど長い。前回よりも平日の勉強時間が若干短くなっている。休日の勉強時間の地域差は大きく、大都市がもっとも短い。就寝時間は、平均で11時24分。大多数は午後11時から午前1時の間に床につき、属性による違いはほとんどない。（図1-4、図1-5）

(7) テスト勉強の開始時期

もっとも多いのは「1週間くらい前から」で全体の31.9%を占める。これと「10日くらい前から」と「2週間くらい前から」を加えると全体の4分の3になる。「一夜漬け」に近い者はごく少数にとどまる。成績上位者ほど早くから試験の準備にとりかかっている。地域差がかなり大きく、郡部では早くから試験勉強をする中学生が多い。（図1-6）

(8) 家での勉強内容

中学生の多くは、「学校の宿題」をこなしながら予習よりも復習にウエイトをおいて家庭での学習を進めている。しかし、「進研ゼミ」のような通信教育も前回にも増して積極的にとり入れられている。全般に男子よりも女子のほうが、成績下位者よりも成績上位者のほうが数値が高い。（表1-4）

(9) 家での勉強の様子

中学生の9割が「出された宿題をきちんとやっていく」と答えている。全般的にまじめな姿勢が目立つが、自分で詳しく調べたり、予習をして授業にのぞむ者は比較的少ない。しかし、勉強への積極的な姿勢は前回よりもむしろ強まっている。（図1-7）

(10) 学習塾と予備校

学習塾や予備校に通っている中学生は、全体の47.5%でほぼ前回並みである。中学生は学校中心ではなく、学校外の学習機会を積極的に利用している。彼らが通う学習塾・予備校の大半は「補習塾」タイプであり、この割合は前回よりも増えている。日数は全体の4分の3が「週に2～3日」に集中している。地域差もきわめて大きい。（図1-8、表1-5）

(11) その他の学習機会

その他の学習機会でもっとも多いのは「進研ゼミ」のような通信教育であり、3割近くが利用している。「塾や予備校の夏期講習（今年の夏休み）」の利用者も多い。学校外の学習機会を積極的に利用しているのが中学生の特徴である。「通信教育」の利用率は前回よりも増え、「宅配の家庭学習教材」は減少した。（表1-6）

(12) 勉強の仕方

中学生の半数以上が「よくする」「時々する」と回答しているのが、「問題集の問題を解く」(81.2%)、「教科書や参考書にアンダーラインを引いたり、カラーマーカーを塗る」(73.0%)、「教科書をくり返し読む」(57.1%)の3つ。女子のほうが手間暇のかかる方法をいとわない。(図1-9)

(13) 勉強方法のタイプ

全体的に、復習を中心に問題集を解いていくスタイルが中心であり、勉強は試験前にまとめてやる中学生が多い。成績の自己評価によって回答が左右される項目もみられた。(図1-10、図1-11)

(14) メディア利用の状況

中学生のメディア利用のうち際立っているのは、「テレビゲーム」である。パソコンの利用率も比較的高いが、学校の勉強の補助教材として積極的に利用するケースは少ない。(図1-12、図1-13)

第2章 中学生の学習観・成績観

(1) 成績の自己評価

中位の3つの選択肢に回答が集中する傾向がある(56.9%)。1つの山をもつ左右対称の分布を示している。中央付近に集中する傾向は、どちらかといえば女子に強い。(図2-1)

(2) どのくらいの成績がとれたらよいか

ほとんどの中学生が真ん中よりも上の成績を希望している。成績下位者よりも成績上位者でこの傾向がひときわ強い。(図2-2)

(3) うんとがんばれば、どのくらいの成績がとれると思うか

9割を超える中学生は、(現在の成績は別にして)がんばれば学年で「真ん中」以上の成績がとれると考えている。しかし、この潜在的な自己概念は、現実の成績によって強く規定されている。(図2-3)

(4) 成績観・学力観

「将来ふつうに生活するのに困らないくらいの学力があればいい」(62.1%)、「できるだけいい高校や大学に入れるよう、成績を上げたい」(56.4%)という回答が比較的多かった。特に学力の手段的な側面を重視する傾向が強い。前回と比べて、ほどほどに楽しむ傾向がいくらか強まったようである。(図2-4、図2-5)

(5) よい成績をとるためには

ベスト3は、「授業をしっかり聞く」(80.2%)、「努力」(79.6%)、「上手な勉強法」(69.0%)である。「生まれつきの能力」(16.1%)、「家族の協力」(10.5%)、「よい学習塾や予備校に行く」(8.4%)は非常に少ない。努力主義、精神主義、個人主義などいくつかの特徴がみられる。(図2-6、図2-7)

(6) 勉強の効用

一生懸命勉強することは、「立身出世」する上で有用であると考えられている。しかし、その経済的な効用については多くの中学生が疑っている。社会的貢献や尊敬の獲得にとっても、勉強することは役に立つと信じられている。(図2-8)

(7) 勉強していてうれしいとき

ほとんどの中学生が、「テストの点数が上がったとき」(96.2%)、「難しそうな問題が自分で解けたとき」(88.6%)、「うれしい」と感じている。男子よりも女子のほうが充足感を感じやすい。しかも女子の場合、人間関係的な要素が「うれしさ」の源泉となりやすいようである。(図2-9)

(8) 勉強していて感じること

生き物や自然への驚きや感動を中学生は感じているが、抽象的な概念操作への具体的な活動は必ずしも好まない。むしろ、人間関係的な方向を志向する。この傾向は、女子に顕著である。(図2-10)

(9) 学習上の悩み

中学生の学習上の悩みは、「どうしても好きになれない科目がある」(67.9%)、「上手な勉強の仕方がわからない」(66.6%)、「覚えなければいけないことが多すぎる」(57.4%)、「こつこつと努力できないで困る」(54.2%)の4つが半数を超えている。1つには、努力主義などの社会的・心理的なプレッシャーの反映であると考えられる。(図2-11、図2-12)

(10) 価値観・性役割観

ほとんどの中学生は「いい友だちがいると幸せになれる」(89.3%)と考えている。地位達成への意欲は、男子のほうが強く抱いている。性役割分業を追認するような固定観念をもつ中学生はかなり少ない。(図2-13)

第3章 比較分析 小学生、中学生、高校生の学習行動と意識の比較

(1) 教科の好き嫌いと理解度

各教科を「好き」と答える者は小学生でもっとも多く、中学生、高校生になると減少する。教科別にみると、変化が小さいのは社会で、反対に変化が大きいのは理科である(図3-1)。その原因とも考えられる授業の理解度は、小学生から高校生にかけて段階的に低下する。理解度の低下が特に著しいのは理科である。(図3-2)

(2) 家での勉強

小学生から高校生になるにつれ、家での学習機会は平日から休日へと移行している(図3-3～図3-5)。中学生と高校生の家での勉強の種類を比べると、高校生は学校の授業を中心としたものであり、中学生は学校と学校以外の学習機会を併用したものである。(図3-6)

(3) 学校外学習機会の利用

学校以外の学習機会の利用率がもっとも高いのは中学生である。高校生の利用率は小学生より低い。一方、学校が提供する正規の授業外の学習機会(補習授業、学校の夏期講習)の利用率は高校生が中学生を上回る。(図3-7)

(4) 勉強の仕方

高校生と中学生の勉強の仕方を比べると、高校生の勉強の仕方は①試験の前にまとめて勉強する、②学校で使う教材中心、③できるだけ考えようとする、④自分で整理しながら勉強する、⑤予習中心、⑥やさしい問題を数多く解く、という特徴がある。(図3-8)

(5) メディアの利用

学校や家庭でのメディアの利用率は高校生がもっとも低い。学校でのパソコン利用率がもっとも高いのは中学生であり、半数近くが利用している。(図3-9)

(6) 成績観

現在の成績の自己評価は、小学生が中学生、高校生に比べて「真ん中」に集まる傾向にあり、学校段階の上昇とともに成績の序列が明確になっていくことがわかる(図3-10)。「どのくらいの成績がとれたらいいか」(図3-11)、「うんとがんばればとれる成績」(図3-12)では、小学生と高校生は上位に集中するが、中学生はやや控えめである。なお、よい成績をとるために大切なものについては、小学生、中学生、高校生ともに「努力」と答えた者が半数以上を占めた。(図3-13)

(7) 学習観

a) 一生懸命勉強することの効用

勉強することが、①社会のために役立つことをするのに、②尊敬される人になるのに、③精神的に豊かな生活をするのに、④よいお父さん、お母さんになるのに、⑤趣味やスポーツなど楽しく生活するために役立つと答えた者は高校生よりも中学生のほうが多く、高校生のほうが勉強の効用を限定的にみている。(図3-14)

b) 勉強をしていて感じること

勉強をしていて「すばらしい」とか「ふしぎだな」と感じる機会は、小学生には多いが、中学生になると減少する。学校段階の上昇とともに、勉強から学ぶことが限定的になっていることがわかる。(図3-15)

(8) 学習上の悩み

学習上の悩みは、学校段階に応じて変化する。小学生の悩みは「どうしても好きになれない科目がある」ことであり、中学生の悩みは「頭の悪さ」や「努力が報われない」など、自己の能力に関連する。高校生の悩みは「どうしてこんなことを勉強しなければいけないのかと思う」「世の中に出てから、もっと役に立ちそうな勉強がしたい」など、学習内容に対する疑問にある。(図3-16、図3-17)